

いわみざわ市の教育

—特集—

こんにちは

今日の教育を考える

- 岩見沢市教育振興表彰
- みんなで教育を考える日
- いじめについて考えよう

～仲間づくり子ども会議を開催しました～



【写真の紹介】

12月4日にいわみざわ子育て総合支援センターで「パパといっしょ！」が開催されました。たくさん子どもたちがお父さんと一緒に楽しい時間を過ごしていました！

岩見沢市教育委員会 Facebook

市内の教育に関する行事の情報、市教委ホームページの更新情報などを発信していますので、ぜひ「いいね！」してください。
<http://www.facebook.com/edu.iwamizawa>



～^{こんにち}今日の教育を考える～

令和4年11月、吉永洋 教育長が就任しました。就任にあたりまして、教育に対する思いについて申し上げます。

1.「黒板に書かれたチョークの世界」と「銀色に光るブリキ缶の宇宙」

朝の空気は肺に染入るほど澄んでいて、天を仰げば真っ青な空が広がっている。煌めく陽光が降り注ぐ細い道。その道を学校へと向かって歩く少年の足取りは鉛のように重かった。

いっそのこと、空を飛んで行けたらいいのになど少年は思う。どうして鳥は空を飛べるのに、人間は飛べないんだろう。空気より軽いガスを体内に入れたら飛べるかもしれない。そんなことを考えていると、学校へと踏み出す少年の足はますます重くなっていった。それでもなんとか足を前に進めようとして、少年は道にあった石ころを蹴りあげる。いびつな形をした石ころは、幾度か地面をバウンドして道を転がっていった。小さく跳ねたかと思えば、次に大きく飛び上がる。その何とも言えぬ不規則な動きが、とっても面白い。

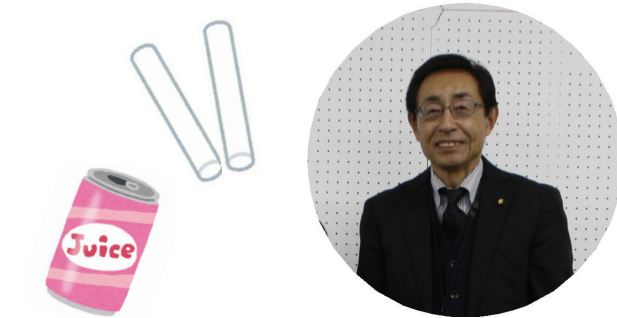
少年は学校に馴染めなかった。授業は面白くないし、おまけに先生の話は長くて、何を言っているのか意味が分からない。分からないから、聞く気も失せてくる。すると、先生は怒り出すのだ。目を吊り上げて怒る。少年の気分は足取りと同じように重くなった。でもでも、やっぱり学校には行かなくちゃならないんだ。気を取り直し、もう一度足を前に進めようとして、今度は道端に落ちていた空き缶を蹴ろうとした。とその刹那、蹴り上げようとした少年の足がびたりと止まる。古びた空き缶は所々凹み、拉げた形を曝け出していた。だけど、その姿は銀色に光り、とってもとっても面白い。

登校して一時間目の授業は算数だった。先生は黒板に、チョークで『1+1=』と書いた。黒いボードに浮かび上がる白い数字と記号。

「さて、この式の答えはいくつかな？」

先生は右手に持っていたチョークを一本、子どもたちに見えるように差し出す。続いて左手でチョークをもう一本掴むと、それも前に差し出し、右手のチョークと一緒に並べて見せた。答えは一目瞭然だ。誰だって答えられると先生は確信する。

はい、はい、と弾む声を響かせ、子どもたちが一斉に手を挙げる。先生は誰に当てようかと思案しながら教室を見渡した。ふと、後ろの席で顔を伏せている少年が目に入った。先生は「いくつにな



る？」と少年に尋ねた。しかし、少年からの返答はない。

「答えは、いくつになる？」先生は再度訊いた。だが、少年は顔を下に向けたまま口を開こうとしない。つかつかと先生は少年の席に歩み寄り、「顔を上げなさい」と声を張り上げた。その声に気づき、ようやく少年が澄んだ目を上げる。彼の黒い瞳の中に映っていたのは、銀色に光る宇宙だったのである。

「トーマス、いったい何をしてるんだ？」

机の下にある少年の手元には空き缶があった。先生は少年から空き缶を取り上げ、「そんなことをしていないで、ちゃんと授業を聞きなさい」と諭した。「さあ、答えはいくつになる？」

先生は右手と左手に持ったチョークを少年に見せ、みたび尋ねた。それでもやはり少年からの返答はない。少年は、先生が手にしているチョークをじっと見つめた。

「先生の右手と左手にあるチョークを合わせてごらん。ほら、2本になるだろ。1+1は2なんだ。分かったかい？」

少年は首を少し傾げながら言った。「どうして、2になるの？」

「どうしてって…。チョークを見たらわかるだろ」

先生の声がほんの少し荒くなった。しかし、少年には先生の声が変わったことが分からない。

「だけど、1個の粘土と1個の粘土を合わせたら、大きな粘土が1個になるよ」

先生の口からため息とも舌打ちともつかぬ声が漏れた。少年は意に介することなく机の下で、なおも空き缶をいじくりまわしていた。銀色に光るブリキ缶は金属にしては薄く、耐食性があり、しかも美しい。それは少年にとって、『1+1』と黒板に書かれた世界より面白く、そして大事な宇宙だったので。

2.「可能性のトビラ」と「目の前の事実」

知っての通り、発明王と呼ばれたエジソンは少年期に教師から持て余され、学校を退学（排除）させられました。また、変わり者であったエジソンは近年になって発達障害ではなかったとも言われています（発達障害という概念はアメリカで20世紀後半になって医学的に確立し、日本で浸透し始めたのは1990年代からになってからです）。

前述したものは、そんなエジソンの幼少時のエピソードを、私なりの趣向で表現してみました（ストーリー上、キャラクターに多少の色付けをしました）。なぜエジソンのことを書いたかということ、この逸話に「教育の在り方」が垣間見えるからなのです。

教師の言動はさておき、彼は「1+1」などの計算力を子どもに身につけさせることが重要であると考えています。片や、エジソン少年にとって重要なのはブリキ缶のもつ不思議な魅力でした。果たして、教師が読み書き計算を教えることは間違いなのでしょう。それとも、エジソン少年が授業以外のものに興味を持つことはいけないことなのでしょうか。ここに教育の隘路があるように思います。

言うまでもなく、教育の目的は未来へ向けた「可能性のトビラ」を拓くことです。性別、年齢、人種、信条、当然ながら障害のあるなしにかかわらず、すべての人に自己実現していく力を養うことです。人は、みんな違う。そして同時に、みんな可能性を持っているのです。それ故に、教育は「目の前の事実」を見つめることから始めなければなりません。社会は今日と明日とで変わり、それに合わせて、人も変化します。なかんずく、目の前にいる子どもは日々刻々と変わります。ダイバーシティ（多様性・相違点）という視点が、これからの教育に求められるのだと思います。

教育の目的は変わらない。されど、教育の手段は変わる必要があるのです。



3.「不易」と「流行」

^{こんにち}今日、教育界は新型コロナウイルス感染拡大に伴う「学校の新しい生活様式」への対応や、来るべきAI時代（Society5.0）を見据えた『令和の日本型学校教育』の実現など、大きな変革期を向かえしました。一人一台の端末活用はもとより、個別最適な学びや協働的な学びを目指すことは、これからの教育にとって中心的なテーマであると言わざるを得ません。

しかしながらそんな時代であるからこそ、見失ってはならないこともあるように思います。それが何かと言えば、「不易」と「流行」です。1997年の中央教育審議会第2次答申で用いられたこの言葉は言い古された感がありますが、今一度頭に置く必要があると考えるのです。

つまり、教育の「目的」は「不易」であり、「手段」は「流行」であるということです。往々にして変化が激しくなると、「流行」の対応ばかりに追われ、「不易」を見失いがちになります。「手段」と「目的」を混同し、子どものサイズを教師や学校に合わせてはならないのです。教育の主体はあくまでも子どもであり、100人の子どもがいれば、100通りの手段があるのですから。

目の前にいる子どもの事実を見つめながら、未来に必要な力は何かを常に問い続けていく。教育に携わる者は、このことを肝に銘じながら子どもたちに関わっていくべきだと考えています。

【主な経歴】

昭和56年 4 月	斜里町立宇登呂中学校	教諭
平成10年 4 月	三笠市立幾生中学校	教頭
平成12年 4 月	新十津川町立新十津川中学校	教頭
平成15年 4 月	滝川市立明苑中学校	教頭
平成18年 4 月	北竜町立北竜中学校	校長
平成21年 4 月	三笠市立三笠中央中学校	校長
平成23年 4 月	三笠市立三笠中学校	校長
平成25年 4 月	岩見沢市立豊中学校	校長
平成27年 4 月	岩見沢市立光陵中学校	校長
平成29年 4 月	岩見沢市青少年センター	所長
令和 3 年 4 月	社会福祉法人三笠市社会福祉事業団 みかさ子ども発達支援センターかざぐるま	

岩見沢市教育振興表彰

岩見沢市教育振興表彰とは？

岩見沢市の教育振興のため、特に功績のあった市民または市民であった方に対して、その功労を表彰するものです。

個人が成したことだけではなく、教育に携わる団体に所属し、その団体の育成・発展に貢献されたことなども表彰の対象となります。

教育関係各種団体、学校等が候補者を推薦し、選考を経て決定します。

今年度は、以下のお二方が受章されました。

教育振興表彰受章者



教育振興功労

秋山 信也 様

教育委員として3期12年にわたり務められ、教育委員会議において、問題提起や解決策の提案を積極的に行うなど、子どもが輝く岩見沢の教育づくりの推進に大きく貢献されました。



体育功労

磯野 昭雄 様

岩見沢剣道連盟の役員として、永年にわたり組織の運営・発展に寄与され、空知管内において青少年剣士の育成をはじめ、剣道技術の向上や普及に大いに尽力されました。

教育振興表彰式

11月7日（月）午前11時より、ホテルサンプラザにおいて、岩見沢市教育振興表彰式が執り行われ、受章者を代表し、秋山様が謝辞を述べられました。当日欠席された磯野様におかれましては、後日、表彰状を伝達いたしました。



第39回
みんなで教育を考える日

入場無料
託児サービス無料
対象：中学生以上

令和4年
11.12
13:00~16:00
いわなび
まつりと
同時開催

第1部 13:00~14:30
教育講演会
テーマ：芸術とスポーツを学ぶ環境を考える
～岩見沢市教育委員会が主催する～
講師：北海道教育大学岩見沢校キャンパス長 山本理人氏
司会：岩見沢市教育委員会 山本理人氏

第2部 14:40~15:50
ワールドカフェ
テーマ：芸術とスポーツを学ぶ環境を考える
～岩見沢市教育委員会が主催する～
講師：北海道教育大学岩見沢校キャンパス長 山本理人氏
司会：岩見沢市教育委員会 山本理人氏

会場
岩見沢生涯学習センター
いわなび
4階アリーナ（土曜18時）
岩見沢市教育委員会
〒070-8501 岩見沢市南1条1丁目1番地4
TEL 0126-23-9236

主催：「みんなで教育を考える日」実行委員会
実行委員：岩見沢市教育委員会、岩見沢市生涯学習センター、岩見沢市文化・スポーツ振興課、岩見沢市生涯学習センターいわなびまつり実行委員会
後援：北海道教育大学岩見沢校、岩見沢市、岩見沢市教育委員会、岩見沢市生涯学習センター、岩見沢市文化・スポーツ振興課、岩見沢市生涯学習センターいわなびまつり実行委員会

第39回

みんなで教育を考える日

教育をテーマにしたイベント「第39回みんなで教育を考える日」が11月12日(土)生涯学習センターいわなびで開かれ、中学校の部活動の指導を地域団体や個人に委ねる「部活動の地域移行」についてみんなで考えました。

第1部 教育講演会 62名参加



北海道教育大学岩見沢校キャンパス長の山本理人氏に部活動に関する講演をいただきました。

部活動の地域移行は単に今の部活動の「形」だけに移すのではなく、移行を契機に芸術やスポーツを次の世代の子供たちがきちんと学べる環境を整えていくことが大切です。

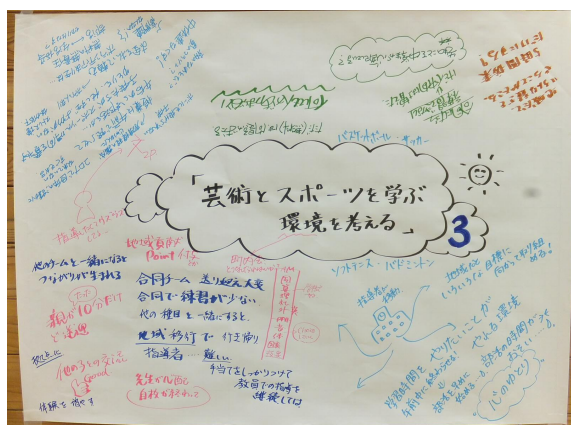
「学校か」「地域か」という議論を超えて、関係する人々が協働しながら、「岩見沢ではこういう芸術、スポーツに出合える」という環境をみんなで考えて行こうと話されました。



第2部 ワールドカフェ 32名参加

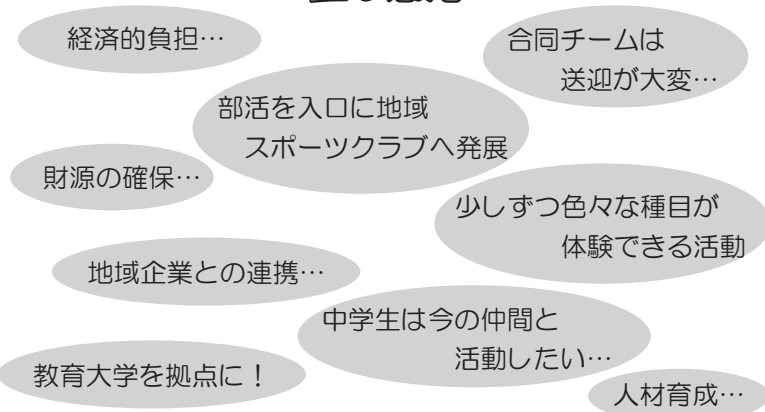


参加者がグループに分かれ、お茶やお菓子を食べながらリラックスした雰囲気の中、地域移行での課題等について、自由に意見交換し内容を模造紙に書き込みました。



様々な意見が出たワールドカフェ

主な意見



部活動の現状や地域移行に向けての課題は様々ですが、「学校」「保護者」「地域」が一体となった活動に関係機関が連携して取り組むことにより、子どもたちが芸術やスポーツに親しむ機会の確保につながります。

参加者からは、「様々な立場の方と交流ができた」「地域移行について視野を広げることができた」などの感想をいただき、とても有意義なイベントになりました。

【お問合せ先】生涯学習・文化・スポーツ振興課 学習活動支援係 電話 0126-23-9236

いじめについて考えよう

～仲間づくり子ども会議を開催しました～

岩見沢市教育委員会では、いじめのない楽しい学校づくりや異校種・異世代交流を通して望ましい人間関係を築くことを目的に、「仲間づくり子ども会議」を開催しています。

今年度は市内小・中学校12校から22名の児童生徒に加え、各グループの進行役として緑陵高校から8名の生徒が参加しました。

また、児童生徒の保護者や教職員も参観し、総勢50名ほどが集う会議となりました。

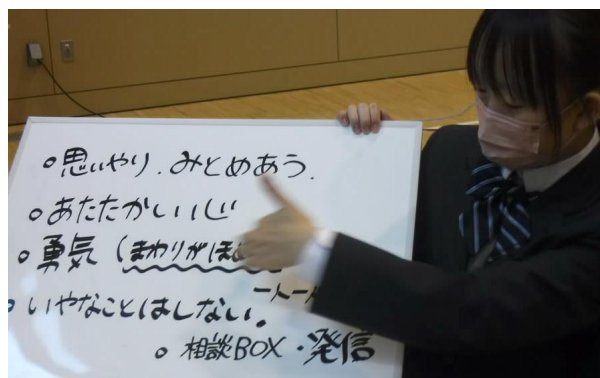
前半は「いじめを防ぐためにはどうしたらよいか」をテーマに、各校のいじめ防止・根絶に向けた取組の交流を行いました。

挨拶運動や集会活動など、それぞれの学校が創意工夫して取り組む活動を紹介し合いました。

また、参加者の振り返りとして、「他校の児童生徒との交流によって得た情報や考え方を、自校でも取り入れていきたい」という前向きな言葉が数多く寄せられました。

後半は、「どうすれば困ったときにSOSを発信できるようになるか」をテーマに、同世代だからこそわかる視点で協議を行いました。

途中、市内の全小・中学校で行ったアンケート結果に基づき、「嫌な思いをしながらも誰にも相談できない子どもたちの実態」を紹介する中で、参加者全員が自分事に置き換えて、真剣に考え議論を深めることができました。



【お問合せ先】指導室 電話 0126-35-5127